

□ 次の文章は、井伏鱒二『黒い雨』の一節で、主人公閑間重松が記した「被爆日記」より、昭和二十年八月十五日の記述の一部です。重松は広島市外にある繊維会社の工場に勤めており、八月六日の出勤途中に被爆し、放射能の雨の中をさまよい歩きました。読んで、あとの問いに答えなさい。

書類を書き終って読み返していると、工場の機械の音がびたりと止まった。十二時に五分前だ。重大放送の時間が来たのである。僕は書類を抽斗^{ひきたし}に入れ、廊下に出ると階段を駆け降りて、^①咄嗟に非常口から裏庭に出た。ラジオは食堂にあるのだが、今、そこに恐るべき重大事が言葉によって発せられる。怖いもの見たさの反対である。みんな食堂の方へ廊下を急いで行っているらしい。その足音が鈍い騒音になって聞えて来た。

裏庭はひっそりとして三方を社屋で取囲まれ、一方は櫟^{くぬぎ}の木の茂る岡の麓^{ふもと}につづいている。その林のなかから六尺幅^{*1}の用水溝がこの裏庭に通じ、事務所の社屋と工務部の社屋の間を涼しい風と共に流れ去っている。溝の手前の湿っぽい地面には杉^{すぎ}や銭^{ぜに}苔^{こけ}がところどころに密生し、溝の向側には疎穂^{そすい}状^{じょう}の薄赤い小花をつけた水引草の^Aグンラク^{グンラク}がある。ところどころにドクダミも生えている。

事務室を外から覗^{のぞ}いて見たが誰もいなかった。食堂へ行こうかと思った。いや、行くまいと思った。工員の部屋を覗いても一人もいない。事務室の横の簡易炊事場を裏口から見ると、焜^{こんろ}炉^ろの上の大きな葉^{やかん}罐^{かん}が湯をたぎらせて蓋^{ふた}を持ちあげている。弁当持参の事務員たちの沸かしている葉^{やかん}罐^{かん}だが、みんなラジオを聞きに行っているの、ほったらかしになっている。

放送はもう始まっていたが、裏庭に聞えて来るのは跡^{あと}切れ跡^{あと}切れの低い言葉であった。僕はその言葉の意味を^②辿^{たど}ろうとする代りに、用水溝に沿うて行ったり来たりして、ちよつとまた立ちどまつたりした。この溝は両側の縁が深さ六尺ほどの手堅い石崖^{いしがけ}づくりになって、溝の底もすっかり石だたみで平らになっている。流れは浅いが、^{*2}ぼさなど一つもなくて、透^すき徹^とった水だから清冽^{せいれつ}な感じである。

「こんな綺麗な流れが、ここにあったのか」

僕は気がついた。その流れの中を鰻^{うなぎ}の子が行列をつくって、いそいそと^{さかのぼ}遡^{さかのぼ}っている。無数の小さな鰻の子である。見ていて実にめざましい。メソッコという鰻の子よりまだ小さくて、僕の田舎でピリコまたはタタンバリという体長^{*3}三寸か四寸ぐらいの^Bヨウ^{ヨウ}ゼイ^{ゼイ}である。

③「やあ、のぼるのぼる。水の匂^{におい}がするようだ」

後から後から引きつづき、数限りなくのぼっていた。

このピリコは広島島の川下から遙^{はるばる}々と遡^{さかのぼ}つて来たものだろう。普通、鰻の子は五月中旬ごろ海から川に遡^{さかのぼ}つて来るが、川口から半里^{*4}ぐらいのところあたりでは、体がまだ柳の葉のように扁^{へんぺい}平^{へい}で半透明である。広島^Cの江湾あたりの漁師はそれをシラスウナギと云っている。ここではもう、ちゃんとした鰻の姿になって、大きな^{どじょう}鱈^{どじょう}ぐらいの長さだが鱈よりもずっと細くて動きが^④流麗^{りゅうれい}である。広島が爆撃された八月六日ごろはどのあたりを遡^{さかのぼ}上^{あが}していたことだろう。僕は溝の縁にしゃがんでピリコの背中を見較べたが、灰色の薄いと濃いのがいるだけで被災したらしいのはいなかった。

「こいつ、釣れるかしら。どんな餌^{えさ}を食うのかしら」

僕がその場を離れて非常口の方へ引き返して行くと、その戸口から一人の工員が出て来て小走りに僕の横を通りすぎた。

「おい君、どうした」と僕は声をかけた。

工員は振返ったが、僕をじろりと見るだけで、簡易炊事場の方へ駆けて行った。作業帽を握りしめているところと云い、その固苦しいな駄^だけだしかたと云い、ただならぬものが感じられた。

食堂の方へ廊下を歩いて行くと、工員たちが今まで一度も見せたこともないような^Cグワ^{グワ}しい表情をして次から次に通りすぎた。なかには泣いている男工員もいた。作業帽で顔を覆^{おお}っている女子工員もいた。寄宿舎に帰る数人づれの女子工員のうち、泣いている一人の肩に連れ一人が手を置いて、

⑤「あんた、泣かんと置き。これでもう空襲はないけん」と慰^{なぐさ}めていた。

僕の目にも涙が込みあげて来た。それを隠すため、食堂の入り口にある手洗^{ちようずばち}鉢^{ばち}で手を洗っていると、配膳^{はいぜん}を終った中年の炊事婦が僕のところへ挨拶^{あいさつ}に来た。

「閑間さん、ほんとにこのたびは、どうも何でございましたなあ」と丁寧^{ていねい}にお辞儀^{じぎ}をした。

「ほんと、あたしのようなこんな婆あでも、口惜しゅうて口惜しゅうて、ほんとになあ何ですが、あんた」^⑥

この炊事婦は泣いてはいなかった。僕の涙はもう引込んでいたが、正直なところ、それは^⑦今^{けい}今日^{けい}正午^{せいごん}すぎの涙として正統派^{せいとうぱ}に属するものであったとは云われまい。僕は幼いとき近所で遊んでいたが、要市という背の高い^⑦無法者^{むぼうしや}によくいじめられた。それでも、その場で泣くのは我慢して家に逃げ帰り、お袋にねだつて拭^{ぬぐ}げた胸元から出してもらった乳房を見ると同時に泣きだすのであった。今だに乳の味が鹹^{しよ}っぱかったのを覚えている。ほつとした瞬間の涙であるが、今日の涙もそれと同じ種類のものではなかったかと思う。

食堂には工場長や職員たちを併せて、二十人あまりしか食卓についていなかった。それも相当年配の者ばかり、みんな石地蔵のように黙りこんでいて、食事をしている者は一人もいなかった。若い炊事婦は布巾^{ふきん}を持って、叱^{のの}られたときにするように配膳^{はいぜん}口の暖簾^{のれん}の下に立っていた。

「工場長、やっと書類を片づけました」と僕は工場長の向い側に腰を卸した。「降伏らしいですな」
 「どうも、そうらしい」と工場長は、^Dアソビがイあつさり云った。「今、陛下が放送されたんだ。しかし、ラジオの調子が悪くてね。工員が調節したが、いじればいじるほど悪くてね、はっきり聞えないんだ。しかし、とにかく降伏らしい」
 食卓の上にあるフスマを混ぜた井^{せんぶりめし}飯は、かさかさに乾いて蠅^{はえ}がたかり、醤油^{しょうゆ}で煮しめた潮吹^{しおふきがい}貝にも蠅がいつぱいたかっていた。誰もそれを追い払おうとする者はいない。

「さあ諸君、元気を出して食べよう」と工場長が、^⑧取って付けたように大きな声を出した。
 「おい、炊事婦のお嬢さん、梅干を持って来い。みんなに、三箇所づつ行きわたるように数を勘^{かんじょう}定して持って来い。明日から、この工場は^Eアキダク^{アキダク}の管理になるかも知れんぞ。そうになったら僕に発言権はないんだ」
 みんな黙っていたが、工場長が箸^{はし}を持ったので僕らも箸を取った。

【語注】 *1 六尺……「尺」は長さの単位。一尺は約三十センチメートルに相当する。

*2 ぼさ……岸辺の草木が水面にかぶさるように生い茂っている所。

*3 三寸……「寸」は長さの単位で、「尺」の十分の一に相当する。

*4 半里……「里」は長さの単位。一里は四キロメートル弱に相当する。

*5 フスマ……小麦を粉にするときに出る皮の部分。

問一 ～～～AとEのカタカナを、正しい漢字に改めなさい。

問二 ——②「辿ろうとする」、④「流麗である」、⑦「無法者」のここでの意味として、最もふさわしいものを、次のア～オからそれぞれ一つ選び、記号で答えなさい。



問三 ——①「咄嗟に非常口から裏庭に出た」とありますが、「重松」がそうした理由を二十字以内で説明しなさい。

問四 ——③「やあ、のぼるのぼる。水の匂がするようだ」とありますが、「重松」はこの時、どういう気持ちでいますか。最もふさわしいものを、次のア～オから選び、記号で答えなさい。

- ア 爆撃以来の逃避行^{とうひこう}がまざまざと思い出され、この鰻もどんな苦難を乗り越えてきたのだろうと、小さな体をいたわっている。
- イ 爆撃を受けたはずなのに、傷一つない鰻がこれほど多くいることに驚き、亡くなった無数の人々の無念をかみしめている。
- ウ 次々にのぼってくる鰻を見ていると、悲惨^{ひさん}な光景が次第に記憶から薄れ、生きてここにいることをようやく実感している。
- エ 一見すると無傷だが、爆撃を受けたに違いない鰻の姿に、明日も知れぬ自分達の身の上を重ねて、不安をつのらせている。
- オ 八月六日にも広島^{ヒロシマ}の川にいたであろう鰻の子の、傷もなく力をみなぎらせて泳ぐ姿に、何とも言えない新鮮さを覚えている。

問五 ——⑤「僕の目にも涙が込みあげて来た」とありますが、この時の「重松」の気持ちを、二十字以内で説明しなさい。

問六 ——⑥「今日今日正午すぎの涙として正統派に属するもの」とはどういうものですか。十五字以内で説明しなさい。

問七 ——⑧「取って付けたように大きな声を出した」とありますが、工場長はこの時、どういう気持ちでいますか。最もふさわしいものを、次のア～オから選び、記号で答えなさい。

- ア 敗戦を信じる事ができず、ラジオの不具合のせいで放送を正確に聞き取れなかったのだと、職員を励^{はげ}ますつもりでいる。
- イ 職員と同様に放心状態だったが、工場長としての最後の一日かも知れないことに気づき、その務めを果たそうと思っている。
- ウ 職員の明日からの行動に不安を覚えたので、大声で指示を与えることによって、改めて工場長の権限を示そうとしている。
- エ 職員も自分も正常な思考ができないので、まずは食事をし、明日からの不測の事態に備えなければならぬと決意している。
- オ 職員とその家族の生活を預かってきた緊^{きんちよう}張^{ちやう}が切れてしまい、今後の生活などどうなっても構わないと捨て鉢^{はち}になっている。

□ 次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。

① あるとき新聞で「リセットすれば、死んだ人間が生き返ると真面目に考えている子供がいる」という記事を読んで、愕然としました。

② なぜそんなふう考えるのでしょうか？それは死を知らないからだと僕は思います。テレビの中でしか死に触れる機会がない。でも、テレビドラマの世界では、いったん死んだ俳優が、また別の番組に出ている。これだけを見ていたら、子供が本当の死を理解するわけがありません。世の中全体が死を忌み嫌い、遠ざけ、死に至る過程を見せない傾向にあることも、子供を正しくない方向に導いている要因ではないかと思えます。

③ 本当は、みんなが自分の家で最期を迎えれば、誰もが命と死についていちばんよく理解できる。何世代も一緒に暮らしていた昔はまさに死が身近にありました。おじいちゃんやおばあちゃんが、自宅で命を引き取ったからです。核家族が進んだ今は、老いを感ずる機会が身近になくなったばかりか、死も病院で迎えることが多くなったせいで、老いも死も、どんどん現実感のないものになっています。

④ 死というのは平等ではありません。

⑤ 一九八六年にアメリカのスペースシャトル「チャレンジャー」が打ち上げ直後に爆発して、乗組員が一度に死亡するという悲しい事故がありました。そのニュースを聞いて、僕も大きな衝撃を受けましたが、自分がどれくらい悲しかったかと言え、疑問です。正直なところ、子供の頃に飼っていたネズミが死んだときのほうが比べ物にならないくらい悲しかった。そのネズミは、ある朝、急に具合が悪くなって、僕の手の中で死んでいきました。このときには、もう一緒に死のうかと思うくらい悲しかったのです。

⑥ 死というのは、身近なものが失われないと、失われたときの悲しみを味わうことはありません。だから、死の意味を知るためには、身近な死を忌み嫌って遠ざけてはいけません。おじいちゃん、おばあちゃんは、孫の手を握りながら死んでいかないといけないと思います。「苦しい、苦しい」と言ってもいい。涙を流してもいい。そういうふうには、死を伝えるということこそ生を伝えることになるはずです。

⑦ 今のお母さんたちの中には、「ペットは死んだら辛いから飼わない」と言う人がいますね。でも、そんなお母さんの子供は本当にかわいそう。ペットは死んで初めて命の大切さを教えてくれるのです。子供は、生きているときと一緒に遊んだ楽しさだけではなく、死んだときの悲しみを味わうことによって、生きていく意味を理解するのです。

⑧ 僕もそうでした。飼っていた生き物が死ぬと、お墓を作って、「長生きさせられなくてごめん」と手を合わせる。そうして死の意味を知っていきました。死んでしまったら元に戻らないということを知ったからこそ、生きていこうと「所懸命この動物を飼おうと思う。子供の頃から考えれば、僕ほど生き物を殺した人間はいないかもしれませぬ。でも、僕ほど命が大事だと思っている人間はいないでしょう。」

⑨ 自分の子供たちを見ていても、そう思います。子供たちは二人とも僕と同じように、あちこちで動物を拾ってきて、いろいろな生き物を飼っていました。自分で生き物を飼っていたら、必然的に死に遭遇します。子供は面白いですよ。生き物は、死んだら動かなくなりませぬ。でも、小さい子供には、最初、動かないことが死んでいることなのだとわかっていません。「A」。でも、どんなことをしても動かない。それでようやく「B」。でも、たとえ気づいても、「C」。「死んじゃった」と言っているだけ。でも、死んだ生き物は、だんだん様子がおかしくなっていくでしょう。腐っていくからね。それで「D」。お墓を作って埋めて、今度は「E」。それが、次第に理解が深まると、腐っていく前に埋めてやるようになります。

⑩ こうして、生き物を飼いながら、増えたと言っては喜び、死んだと言っては泣き、命には始まりがあって終わりがあるということを理解していったのです。死んでしまったら、どうしようもできないということを実感しなければ、命はわかりませぬ。だから、僕の子供たちは、間違えても永遠の命を得るために修行しようなんて思わないはずですよ。命の本質がわかるのは、こういう機会があつてこそだと思えます。こういうことが命を刻み込む唯一の方法なのです。

⑪ だから、子供にはできるだけ小さいうちから生き物に触れる体験をさせたり、命を感じさせたりすることが大事なのです。お母さんとしては辛いかもしれないけど、その子が最も愛した存在が死んでいく辛さを味わわせることは、子供にとって必要なことなのです。自分の子供のときの経験から、「あんな辛い思いを子供にさせたくないから」と、お母さんがペットを飼うのを勝手にやめてしまうなんて大きな間違いだと思います。そんなことをしていたら、子供には命の大切さは伝わりませぬよ。

⑫ 最近のニュースを見てみると、他人の命を大切にしない子供がいます。それどころか自分の命も大切にしない子供もいます。命を自分の意思で絶つなんて、命に失礼。もう少し命を真剣に見つめれば、わかるはずなのです。僕の持っている命とみなさんが持っている命は違う。同じじゃないからこそ大事にしなくちゃいけない。もし同じものだとしたら、入れ替えがきくわけですからね。子供がそれに気づかないのは、すべて死を遠ざけてきた結果です。生はいつも死と隣り合わせ。死を避けていたら、命を理解させることは絶対にできないでしょう。

(小菅正夫『生きる意味って何だろう?』より)

問一 ——— ① 「正しくない方向」とありますが、その方向に導かれた子供はたとえばどのような考えを持つようになりますか。本文 [1] [3] の中から「…という考え」に続く十五字以上二十字以内の表現をぬき出しなさい。

問二 ——— ② 「自分がどれくらい悲しかったかと言えば、疑問です」とありますが、それはなぜですか。理由を説明しなさい。

問三 ——— 【A】 A～Eにあてはまるように、次のア～オを並べかえるとすると、どのような順番になりますか。正しいものを次の1～6から選び、数字で答えなさい。

ア 耐^たえられなくなって埋めるのです
イ なかなか埋めようとはしません
ウ わんわん泣く
エ 死んでいることに気づくのです
オ 一所懸命いじっています

1 ウ↓オ↓イ↓ア↓エ 2 イ↓オ↓エ↓ウ↓ア

3 オ↓エ↓イ↓ア↓ウ 4 オ↓ウ↓エ↓イ↓ア

5 イ↓ウ↓オ↓エ↓ア 6 ウ↓イ↓ア↓オ↓エ

問四 ——— ③ 「そう」・④ 「こういう」について、それぞれが指し示す内容を答えなさい。

問五 ——— ⑤ 「他人の命を大切にしない子供がいます。それどころか自分の命も大切にしない子供もいます」とありますが、「命を大切にしない子供」はどのようにして生まれたと筆者は考えていますか。「世の中が」に続けて三十字以内で答えなさい。

③ 次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。

それでも、自分に「向いている仕事」^①をしている人は、世の中にそう多くはないようです。わたしは、実は小説を書くことがそれほど好きではありません。辛いとか苦しいと感じるわけではないのですが、決して好きではないのです。小説を書くときは普段よりも脳をたくさん使わないといけないので面倒くさいし、大変だし、疲れます。ただし、確かに「向いている」と思います。それは、絶対に、飽きないからです。また、小説を書いたあとに感じる充実感や達成感^{じゅうじつ}は、他では決して味わうことができない特別なものです。

【A】小説を書くのが好きではないからと言って、ほかの「仕事」^アをしようとか、探そうとか、そんなことはまったく思いません。また小説を書くために、誰か専門家に会って話を聞いたり、資料として本を読むのも苦痛ではありません。自分に「向いている仕事」というのは、「好き」という言葉で語れるものではないのかも知れません。いくら努力しても苦痛ではなく、絶対に飽きない、それが「向いている仕事」ではないでしょうか。

わたしは、十三歳のころ、いろいろなことを想像するのが好きでした。他の子が思いもつかないことを考えたり、それを友だちに話して聞かせたりするのが得意でした。また絵を描いたり、本を読むのも好きでした。作文でいろいろな賞を取ったこともあります。面倒くさいので文章を書くのは「好き」ではありませんでした。小説を書くときには、文章を書くのが好きということよりも、いろいろなことを想像するのが好き、というのがより重要です。文章が書ける人は大勢^イいますが、他の人が想像もしないことを考えることができる人は、そう多くはないからです。

十三歳のみなさんは、「好き」ということを「入り口」として考えてください。「国語が好き」「理科が好き」「休み時間が好き」というそれぞれの入り口から入って、その向こう側にある職業の図鑑^{ずかん}を眺めてみるといいと思います。確かに、現実的には、自分に「向いている仕事」をしている人は少数かも知れません。【B】すべての十三歳は、「向いている仕事」につく可能性を持っています。学校の勉強ができない子も、自信がなくて内気^{うちま}な子も、友だちがいなくて寂しい子も、家が貧しい子も、大人になるためのぼうだいな時間を持っているからです。その時間が、可能性なのです。だから、自分に「向いている仕事」が必ずあるはずだ、と心のどこかで強く思うようにしてください。

「好きなことを探さない」「好きなことを見つけない」とよく言われます。でも、それではどうやって探せばいいのか、どうすれば見つけることができるのか、教えてくれる人はなかなかいません。それは、^②「向いている仕事」というのは、探せば見つかるものではないからです。砂浜で貝を探したり、原っぱでバッタを探したり、花畑^{ちやう}で蝶^{ちょう}を探すように、探せば見つかるものではないのです。つまりそれは、「探して見つける」ものではなく、「出会う」ものなのです。

「出会う」ために欠かせないのは、好奇心です。数学が苦手な十三歳は、授業で先生が黒板に公式を書いているとき、努力しないと黒板に注意を向けることができません。意思の力で、努力して、黒板に注意を向ける必要があるのです。でも、ひそかに好きだと思っている人が近くにいると、別に努力しなくても、自然にその人の顔や仕草^エや動作に心が引きつけられます。「ん？ これはいったい何だろう」と、わたしたちが注意を向けるときの心の動きには、好奇心が関わっています。わたしたちは、好奇心が刺激^{しげき}されると、努力なしに、自然に心が傾きます。すべては、「ん？ これはいったい何だろう」からはじまるのです。

そして、「出会う」ためには、「どこかに自分が好きなことがきつとあるはずだ」「将来的に、自分に向いている仕事^オがきつとあるはずだ」と心のどこかで強く思う必要があります。そう思っていないければ、何かに出会って、心が傾いたときに、「これかも知れない」と思うことができないからです。また、ぼんやりと日々を過ごすよりも、いろいろなことに興味を持つほうが、出会う確率は大きくなります。「これかも知れない」と思ったものが、実は勘違い^{かんちが}だったり、実際はそれほど好きじゃないことがあとでわかって、がっかりすることはあります。

【C】宇宙飛行士に興味を持った十三歳は、宇宙のことを知りたいと思うはずで、宇宙に関するいろいろな本を読み、映画やテレビ番組^オを見ることがでしょう。そのうちに、宇宙エレベーターという未来の乗り物に興味も移るかも知れません。そのあと、宇宙エレベーターの牽引^{けんいん}ベルトに使われるカーボンナノチューブという新素材に目を奪^{うば}われ、やがてナノテクノロジーという先端^{せんたん}技術に興味を持つ可能性もあります。何か一つに興味をおぼえると、その背後にあるぼうだいな情報と知識の入り口に立つことができます。つまり「出会う」可能性が大きく広がるのです。

③ 「自分探し」という言葉があります。わたしがもつとも嫌いな言葉の一つです。自分探しとは、ある本によると、自分はどういう人間なのか、どういう人間になりたがっているのか、どんなことでハッピーになれるのか、過去から現在に至る自分を振り返り、また未来を描き、自分なりの価値観を見つける、というようなことのようなのです。ただし、それらの答えは自分の中にあるわけではありません。他人や、興味ある対象との出会いの中でしか見つからないものです。自分はどうな人間に興味があるのか、どんなことに好奇心が向いていて、何をすればハッピーになれるのか、というような問いは、自分を探すのではなく、他者と向き合い、興味ある対象との出会いを通して成立するものです。

二十年以上前ですが、わたしはサハラ砂漠を車で旅したことがあります。サハラ砂漠は、気が遠くなるほど広く、砂と砂丘以外何もなくて、車を時速百二十キロで何時間走らせても、まったく景色が変わりませんでした。真っ暗で何も見えない夜の砂漠を走ったこ

ともありました。そんなとき、人間は自分自身と向かい合います。景色がまったく変わらなくて、周囲に何もないので、自分はいったい何者だろう、自分はいったいどんな人間なんだろう、とつい考えてしまうのですが、そんなことを考えても、答えは見つかりません。自分探しにも、答えなどないと思います。

答えなどないのだから、自分なんか探してもムダです。それよりも、わたしたちが生きているこの社会、広い世界と接し、知ることのほうがはるかに重要です。社会や世界を知るためには、いろいろな方法があります。もともと知られているのは、読書でしょう。本を読むわけですが、十三歳の誰もが読書好きというわけではないと思います。本を読むのが苦痛な十三歳もいるでしょう。でも、「興味があること」「好きなこと」と出会いたいと思えば、またすでに会っていけば、読書はワクワクするものになります。逆に言えば、「興味があること」「好きなこと」がわかっている十三歳や、「向いている仕事」を持っている大人は、自分探しなどという言葉にまどわされることがないのです。

職業というのは、単にお金を稼ぐ手段ではありません。その仕事をすることで、生きていくために必要な充実感、人間としての誇り、そして仲間や友人を得ることができます。「D」、仕事を通じて、わたしたちはいろいろな情報、知識、技術、技能を学び、自らを向上させることができ、社会の仕組みや世界で起きていることを理解することができます。たとえば、職業は、その人と社会・世界をつなぐ窓のようなものであり、大切な架け橋のようなものです。

(村上龍『新十三歳のハローワーク』より)

【語注】*1 カーボンナノチューブ……炭素原子が網目のように結びついて筒状になったもの。

*2 ナノテクノロジー……ナノメートル(一〇億分の一メートル)単位で原子や分子をあつかう技術。

*3 サハラ砂漠……アフリカ大陸北部にある砂漠。

問一 【A】 【D】 にあてはまる言葉を、次のア～カの中から一つずつ選び、記号で答えなさい。

ア さて イ さらに ウ だから エ たとえば オ でも カ ところで

問二 ㉒ ア「仕事」、イ「大勢」、ウ「内気」、エ「仕草」、オ「番組」の熟語は、読みの特徴・違いによって二つのグループに分けられます。アと同じグループにふくまれるものをすべて選び、記号で答えなさい。

問三 ① 「向いている仕事」とありますが、筆者が考える「向いている仕事」とはどのようなものですか。説明しなさい。

問四 ② 「十三歳にとつての『好きなこと』、大人にとつての『向いている仕事』というのは、探せば見つかるというものではない」とありますが、そのかわりに筆者はどのようなことが必要であると述べていますか。説明しなさい。

問五 ③ 『自分探し』という言葉があります。わたしがもともと嫌いな言葉の一つです」とありますが、筆者は「自分探し」のかわりにどのようなことをすべきだと述べていますか。三十字以内でぬき出しなさい。

問六 「十三歳のみなさん」が職業・仕事に出会うことについて、本文の内容と合うものを、次のア～オの中から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 多くの仲間や友人を通してぼうだいな情報と知識にふれることができるような「仕事」に出会うことが大切だ。
イ 現在までの自分を振り返り、自分はどんな人間なのかをじっくりと考えれば、「向いている仕事」に出会うことができる。
ウ 十三歳のみなさんには、大人になるためのぼうだいな時間があるので、自分に「向いている仕事」に出会う可能性は大きい。
エ 「好きなこと」からはじめれば、「向いている仕事」を見つける方法を教えてくれる人にいつか必ず出会うことができる。
オ 「向いている仕事」に出会ったと思ったのに、違っていたことがわかって、がまんしてもっと学び続けられよう。